【晉紀三十四】 起重光赤奮若,盡玄黓攝提格,凡二年。

■東晋、●北魏、▲後燕、続国訳漢文大成、経子史部第7巻055p

# 安皇帝丁隆安五年(辛丑, 401年)

南涼 <u>[武威王の利鹿孤の周囲に配慮した自立策]</u> 春,正月,武威王の利鹿孤は帝を稱せんと欲し,群臣は皆な之を勸める。安國將軍の瑜勿倫は曰く、

「吾が國は上世より以來、被發 (続は髪) 左衽 (乱れた髪と左前、野蛮な風習), 冠帶之飾り無く, 水草を逐いて遷り徙り, 城郭室廬は無く, 故に能く沙漠を雄視し, 中夏に抗衡せり。今大號を舉げ, 誠に民心に順うべし。然らば都を建て邑を立て, 以て患いを避け難く, 倉庫に儲畜すれば, 敵人の心を啟かん。晉の民を城郭に處き, 農桑を勸め課し以て資儲に供し, 國人を帥いて以て戰射を習うに如かず。鄰國が弱ければ則ち之に乘り, 強ければ則ち之を避ければ, 此れ久長之良策也。且つ虚名にして實無ければ, 徒らに世之質的 (まと) と為るに足る, 將に安んぞ之を用いるや!」

### 利鹿孤は曰く、

「安國之言は是れ也。」(7-056p)

乃ち更に河西王 (河西全体四郡の占領をめざす志、武威は一郡のみ) を稱し、廣武公の**傉檀**を以て都督中外諸軍事、 涼州牧と為し、尚書事を錄さしむ。

■二月, 丙子 (1日), **孫恩**は浹口を出, 句章 (浙江省會稽道慈谿県、現・寧波市慈渓市) を攻め, 拔く能わず。**劉 牢之**は之を撃ち, **恩**は復た走りて海に入る。

**後秦**秦王の興は**乞伏乾歸**をして還りて苑川に鎮ぜしめ、盡く其の故の部衆を以て之に配す。(乞伏乾歸は柔軟な策で、一時後秦につく)

## 【後涼の呂超は呂纂誅殺、呂隆立つ】

後涼<u>「涼王呂纂は呂超を脅して、宴会後に討たれる、後継争い</u>涼王の纂は酒を嗜み獵を好み、太常の 楊穎は諫めて曰く、

「**陛下**は天に應じて命を受け、當に道を以て之を守るべし。今疆学(境)日々に整まり、二嶺之間(姑蔵の南に洪池嶺、西に丹嶺あり)に崎嶇(辛苦)し、**陛下**は兢兢として夕に傷れ以て先業を恢弘(押し広める)せず、而して游戦に沈流(沈み溺れる)し、國家を以て事を為さず、臣は竊に之を危うしとす。」

纂は遜辭して之を謝し、然るに猶ほ(改) 悛せず。番禾 (世粛省世涼道永昌県、現・金昌市永昌県の西) 太守の**呂超**は 擅。に鮮卑の**思盤**を撃ち、**思盤**は其の弟の**乞珍**を遣わして**纂**に訴え、**纂**は**超**及び**思盤**に命じて皆な入朝 せしむ。**超**は懼れ、姑臧に至り、深く自ら殿中監の**杜尚**に結ぶ。**纂**は**超**を見、之を責めて曰く、

「卿は兄弟の桓桓 (勇武の貌) たるを恃み,乃ち敢えて吾を欺く。 要 ず當に卿を斬るべし,天下は乃ち定まらん!

超は頓首して謝す。纂は本から以て超を恐愒せんとし、實は之を殺すの意無し。因りて超、思盤及び群臣を引いて同じく內殿にて宴す。超の兄の中領軍の隆は數々纂に酒を勸め、纂は醉い、步挽車 (人力車) に乗り、超等を將いて禁中に游ぶ。琨華堂の東閣に至り、車は過ぎるを得ず、纂の親將の寶川、駱騰は劍を壁に倚せ、車を推して閤を過ぎる。超は劍を取りて纂を撃ち、纂は車を下りて超の禽となり、超は纂を刺し

て胸を<sup>抗</sup>す。川、騰は超と格戰し、超は之を殺す。纂の后の楊氏は禁兵に命じて超を討たしむ。杜尚は之を止め、皆な仗を捨てて戰わず。將軍の魏益多は入り、纂の首を取る。楊氏は曰く、

「人は已に死し、土石の如し、復た知る所無し、何の復た其の形骸を養うに忍びず乎!」

**益多**は之を 罵り、遂に**纂**の首を取りて以て猶えて、曰く、

「**纂**は**先帝**之命を違え,**太子**を殺して而して自立し,荒淫暴虐なり。番禾太守の**超**は人心に順いて而して 之を除き,以て宗廟を安んじる。凡そ我が士庶は,茲の休慶を同じくせんとす!」

**纂**の叔父の巴西公の**佗**、弟の隴西公の**緯**は皆な北城に在り。或は**緯**を説いて曰く、

「超は逆亂を為し、公は介 (大なり) 弟之親を以て、大義に使りて而して之を討つべし。**姜紀、焦辨**は南城に在り、楊桓、田誠は東苑に在り、皆な吾が黨也、何の濟らざるを患うや!」

**緯**は兵を嚴にして**佗**と共に**超**を撃たんと欲す。**佗**の妻の**梁氏**は之を止めて曰く、

「緯、超は俱に兄弟之子なり、荷為れぞ**超**を捨てて**緯**を助け、自ら禍の首と為る乎!」 **佗**は乃ち**緯**に謂って曰く、

「**超**は事を舉げて已に成り、武庫に據り、精兵を擁す、之を圖むは甚だ難し。且つ吾れは老いたり矣、能 く為す無き也。」

超の弟の邈は緯に寵有り、緯を説いて曰く、

「纂は兄弟(紹・弘)を賊殺し,隆(字は永基、呂光の弟の實の子)、超は人心に順いて而して之を討ち,正に明公を尊立せんと欲する耳。(7-057p) 方に今は明公は先帝之長子なり,當に社稷の主にして,人々に異望無し,夫れ復た何をか疑うや!」

**緯**は之を信じ, 乃ち**隆、超**と結盟し, 單馬にて入城す。**超**は執りて而して之を殺す。位を**隆**に讓らんとし, **隆**は難色有り。**超**は曰く、

「今龍に乗りて天に上るが如く、豊に中に下る可し!」

隆 (字は永基、呂光の弟の子) は遂に<u>天王</u>に即位し,大赦し,改元して神鼎 (超は先に番禾にて小鼎を得て、年号とする) とす。母の**衛氏**を尊して**太后**と為す。妻の**楊氏**を后と為す。**超**を以て都督中外諸軍事、輔國大將軍と為し、 尚書書事を錄さしめ,安定公に封じる。

纂に諡して靈帝と曰う。

後涼 [呂纂の皇后の楊氏は呂超に従わず] 纂の后の楊氏は將に宮を出んとし、超は其の珍寶を採まんを恐れ、命じて之を索さしむ。楊氏は曰く、

「爾は兄弟に不義にして、手刃して相い屠る。我は旦夕に死人なり、安んぞ寶を用いるを為さんや!」 **超**は又た玉璽の在る所を問い、**楊氏**は曰く、

「已に之を毀したり矣。」

后は美色有り、超は將に之を納れんとし、其の父の右僕射の桓に謂って曰く、

「后が若し自殺すれば、禍いは卿の宗に及ぶべし!」

桓は以て楊氏に告げる。楊氏は曰く、

「大人は女を賣りて氐に與え以て富貴を圖り、一たびすら之れ甚だしと謂うに、其の再びす可き乎!」遂に自殺し、諡して**穆后**と曰う。**桓**は河西王の**利鹿孤**に奔り、**利鹿孤**は以て左司馬と為す。

### 【劉裕は孫恩討伐に活躍】

■ [孫恩を翻弄する劉裕] 三月, 孫恩は北に海鹽(浙江省錢塘道海鹽県、現・嘉興市海塩県) に趣き, 劉裕は隨っ

て而して之を拒み,海鹽の故治(浙江省錢塘道平湖県、現・嘉興市平湖市)に築城す。**恩**は日々來たりて城を攻め, **裕**は屢々撃ちて之を破り,其の將の**姚盛**を斬る。城中の兵は少く敵せず,**裕**は夜は旗を優せて衆を匿し, 明晨に門を開き,羸疾數人をして城に登ら使む。賊は遙かに**劉裕**の在る所を問い,曰く、 「夜已に走れり矣。」

賊は之を信じ、争いて城に入る。**裕**は奮撃し、大いに之を破る。**恩**は城の拔く可からざるを知り、乃ち進みて滬瀆(江蘇省滬海道嘉定県、現・上海市嘉定区)に向かい、**裕**は復た城を棄てて之を追う。

■海鹽の令の**鮑陋**は子の**嗣之**を遣わして吳兵一千を帥いて,前驅と為らんと請わしむ。**裕**は曰く、「賊兵は甚だ精にして,吳人は戰いを習わず,若し前驅して利を失えば,必ず、我が軍を敗らん。後に在りて聲勢を為す可し。」

**嗣之**は從わず。**裕**は乃ち多く旗鼓を伏せ,前驅は既に交わり,諸伏は皆な出る。**裕**は旗を舉げ鼓を鳴らし, 賊は以て四面に軍有りと為し,乃ち退く。**嗣之**は之を追い,戰沒す。**裕**は且つ戰い且つ退き,領する所死 傷して且に盡きんとし,向に戰いし處に至り,左右に死人の衣を脫取せ令めて以て閒暇を示す。賊は之を 疑い,敢えて逼らず。**裕**は大呼して更に戰い,賊は懼れて而して退き,**裕**は乃ち引いて歸る。

南涼河西王の利鹿孤は涼を伐ち、涼王の隆と戰い、大いに之を破り、二千餘戶を徙して而して歸る。

●夏,四月,辛卯(17日),魏人は鄴の行台(置く事110巻隆安二年にあり)を罷め,統べる所の六郡(魏郡・陽平・廣平・汲郡・頓丘・清河)を以て相州を置き,**庾岳**を以て刺史と為す。**(7-058p)** 

西秦(後秦配下) **乞伏乾歸**は苑川に至り,**邊芮**を以て長史と為し,**王松壽**を司馬と為し,公卿、將帥は皆な降りて僚佐偏裨と為る。

# 【北涼の段業は滅び、蒙遜立つ】

北涼 [段業と沮渠蒙遜との確執] 北涼王の業は沮渠蒙遜の勇略を憚りて、之を遠ざけんと欲す。蒙遜も亦た深く自ら晦匿す。業は門下侍郎の馬權を以て蒙遜に代わりて張掖太守と為す。權は素より豪雋にして、業の親重する所と為り、常に蒙遜を輕侮する。蒙遜は之を業に譖して曰く、

「天下は慮るに足らず、惟だ當に**馬權**を憂うる耳。」

業は遂に權を殺す。(胡三省曰く、余を以てこれわ観れば、索嗣・馬權は皆庸夫なるのみ、世資に恃倚して気を使う、能く為す無きなりと)

|北涼|[蒙遜は西安太守、外に出る] 蒙遜は沮渠男成に謂って曰く、

「**段公**は鑒斷 (明鑒決斷) 之才無く,撥亂之主に非ず,向 (続は曏) に憚る所の者は惟だ**索嗣** (死すこと前巻四年にあり)、**馬權**のみ。今皆な已に死し,**蒙遜**は之を降 (続は除) して以て兄を奉じんと欲すは,何如か?」 **男成**は曰く、

「業は本は孤客にして、吾が家の立つる所為り、吾が兄弟を恃むこと、猶ほ魚之水有るがごとし。夫れ人は我を親信し而して之を圖るは、不祥なり。」

**蒙遜**は乃ち西安太守と為るを求める。**業**は其の外に出るを喜び、之を許す。

北涼 [人望ある男成を段業に殺させ、蒙遜は兵を起こす] 蒙遜は男成と同じく蘭門山 (甘粛省甘涼道山丹県、現・張掖市山丹県) を祭るを約し、而して陰かに司馬の許鹹をして業に告げて曰わ使む、

「**男成**は假を取るの日 (体暇の日) を以て亂を為さんと欲す。若し蘭門山を祭るを求めれば,臣の言は驗わなり矣。」

期至り、果たして然り。**業**は**男成**を収め、死を賜わる。**男成**は曰く、

「蒙遜は先に臣と反を謀り、臣は兄弟之故を以て、隱して而して言わず。今臣が在るを以て、部衆の從わざるを恐れ、故に臣に山を祭るを約し而して返りて臣を誣し、其の意は王之臣を殺すを欲する也。乞う詐りて臣死すと言い、臣の罪惡を暴わせ、蒙遜は必ず反せん。臣は然る後に王命を奉じて而して之を討てば、克たざるは無し矣。」

業は聽さず、之を殺す。**蒙遜**は泣きて衆に告げて曰く、

「男成は段王に忠なり,而るに段王は故無くして之を枉殺し,諸君は能く仇を奉じると為す乎?且つ始め者段王を共立するは,以て衆を安ぜんと欲する茸,今州土は紛亂し,段王の能く濟する所に非ざる也。」 男成は素より衆心を得,衆は皆な憤泣して爭い奮い,氐池(甘粛省甘涼道山丹県、現・張掖市山丹県)に至る茈,衆は一萬を逾ゆ。鎮軍將軍の臧莫孩は部する所を帥いて之に降り,羌、胡の兵を起こして蒙遜に應じる者多し。蒙遜は進みて侯塢に壁(続は逼)す。

| <u>北涼| [段業の軍崩壊と誅殺]</u>| 業は先に右將軍の田**昂**を疑い,之を囚うる。是に至り**昂**を召し,謝して而して之を赦し,武衛將軍の梁中庸と共に蒙遜を討た使む。別將の王豐孫は業に言って曰く、

「西平の諸田は、世々反く者有り。**昂**の貌は恭々しく而して心は險にして、信ず可からざる也。」 **業**は曰く、

「吾は之を疑うこと久しく矣、但だ**昂**に非ざれば以て**蒙遜**を討つ可き者は無し。」

**昂**は侯塢に至り,騎五百を帥いて**蒙遜**に降り,**業**の軍は遂に潰え,**中庸**は亦た**蒙遜**に詣りて降る。

北涼 [蒙遜は段業を斬る] 五月,蒙遜は張掖に至り,田昂の兄の子の承愛は關を斬りて之を內れ,業の左右は皆な散る。蒙遜は至り,業は蒙遜に謂って曰く、

「孤は孑然 (孤立の貌) たる一己にして、君の家の推す所と為る、(7-059p) 願はくは餘命を丐い、東に還りて妻子と相い見ゆるを得使めん。」

**蒙遜**は之を斬る。(北涼の段業は4年で滅びる) **業**は,儒素(優柔質素)の長者にして,他に權略無く,威禁は行なわず,群下は命を 擅 にす。尤も卜筮、巫覡を信じ,故に敗に至る。

北涼沮渠男成之弟の富占將軍の俱優は戶五百を帥いて河西王の利鹿孤に降る。優は, **石子** (106 巻孝武帝太元 +年にあり) 之子也。

■孫恩は滬瀆を陷とし、吳國內史の**袁山松**(続の袁崧は誤り)を殺し、死者は四千人。

後涼 後秦 [後秦は後涼の混乱に乗じる] 涼王の隆は多く豪望を殺し以て威名を立て、內外は囂然とす。 人々は自ら保たず。魏安 (郡、甘粛省甘涼道古浪県、現・武威市古浪県) の人の**焦朗**は遣使して秦の隴西公の**碩徳**を 説いて曰く、

「呂氏は武皇 (呂光) の世を棄てしより、兄弟は相い攻め、政綱は立たず、競いて威虐を為す。百姓は饑饉し、死者は過半。今其の纂奪之際に乗り、之を取ること掌を返すよりも易く、失う可からざる也。」 碩德は秦王の興に言い、歩騎六萬を帥いて涼を伐ち、**乞伏乾歸**は騎七千を帥いて之に從う。

## 【孫恩は丹徒に迫る、劉裕迎撃】

■ <u>[孫恩は来襲して建康は震駭す]</u> 六月,甲戌(1日朔),孫恩は海に浮かんで丹徒(江蘇省金陵道丹徒県、鎮 江市丹徒区)に奄至し,戰士は十餘萬,樓船は千餘艘,建康は震駭す。乙亥(2日),內外は戒嚴し,百官は 入りて省内に居る。冠軍將軍の**高素**等は石頭を守り,輔國將軍の**劉襲**は淮口(秦淮の江の入る口)を柵斷し, 丹陽尹の**司馬恢之**は南岸に戍し,冠軍將軍の**桓謙**等は白石に備え,左衛將軍の王**嘏**等は中堂に屯し,豫州 刺史の譙王の尚之を征(続は徴)して入りて京師を衛らしむ。

- ■<u>「劉裕は少数にて大反撃</u>] 劉牢之は山陰より兵を引いて恩を邀撃し、未だ至らず而して恩は已に過ぎ、乃ち劉裕をして海鹽より入援せ使む。裕の兵は千人に滿たず、倍道兼行し、恩と俱に丹徒に至る。裕の衆は既に少く、加えて遠きを\*\*\*

  「沙・して疲勞するを以て、而して丹徒の守軍に門志有るは莫し。恩は衆を帥いて鼓噪し、蒜山(江蘇省金陵道丹徒県の西。山の上に蒜多し、現・鎮江市丹陽市)に登り、居民は皆な荷擔して而して立つ。裕は所領を帥いて奔り撃ち、大いに之を破り、崖に投げて水に赴きて死する者は甚だ衆く、恩は狼狽して僅かに船に還るを得る。然るに恩は猶ほ其の衆を恃み、尋いで復た兵を整えて徑ちに京師に向かう。後將軍の元顯は兵を帥いて拒み戰い、頻る利あらず。會稽王の道子は他の謀略無く、唯だ日々蔣侯廟(蔣山にあり、漢末に秣陵の尉の蔣子文は賊わ討ち山下に戦死す、呉の孫権は為に廟を江東に立てる、朝野これに祈り、率和靈應有りと云う)に禱る。恩は來たりて漸く近づき、百姓は恟懼す。譙王の尚之は精鋭を帥いて馳せ至り、逕に積弩堂に屯す。恩の樓船は高く大きく、風に\*\*溯。りて疾行するを得ず、數日して乃ち白石に至る。恩は本諸軍は分散するを以て、不備を掩わんと欲す;既に而して尚之が建康に在るを知り、復た劉牢之の已に還り、新洲(京口の西、洲の中)に至るを聞き、敢えて進まず而して去り、海に浮かびて北に郁洲(江蘇省徐海道灌雲県の東北海中、現・連雲港市灌雲県)に走る。恩の別將は攻めて廣陵(江蘇省淮揚道江都県、現・揚州市広陵区)を陷し、三千人を殺す。寧朔將軍の高雅之は恩を郁洲に撃ち、恩の執る所と為る。
- ■<u>[桓玄は虚を狙う]</u>桓玄は兵を厲ぎ卒に訓え、常に朝廷之隙を伺い、**(7-060p)孫恩**の京師に逼るを聞き、牙 (天子将軍の旗)を建て衆を聚め、上疏して之を討つを請う。元顯は大いに懼れる。**恩**の退くに會して、元顯は詔書を以て之を止め、玄は乃ち嚴を解く。

北涼 [北涼の沮渠蒙遜の政治体制] 梁中庸等は共に沮渠蒙遜を推して大都督、大將軍、涼州牧、張掖公と為し,其の境内に赦し,改元して永安とす。蒙遜は從兄の伏奴を署して張掖太守、和平侯と為し,弟の挐を建忠將軍、都谷侯と為し,田昂を西郡太守と為し,臧莫孩を輔國將軍と為し,房晷、梁中庸を左、右長史と為し,張騭、謝正禮を左右司馬と為す。賢才を擢任し,文武は鹹な悅ぶ。

南涼 [南涼はいたずらに徒民をやめる] 河西王の利鹿孤は群臣に命じて得失を極言せしむ。西曹從事の 史暠は曰く、

「**陛下**は將に命じて出征せしめ,往けば捷たざる無し。然れど綏寧を以て先と為さず,唯だ民を徙すを以て務めと為す。民は土に安んじ遷るを重しとす,故に多く離叛し,此れ將を斬り城を拔けども而して地廣きを加えざる所以也。」

利鹿孤は之を善とす。

●秋,七月,魏の兗州刺史 (魏はいまだ兗州を得ず) の長孫肥は歩騎二萬を將して南に許昌を徇じ,東に彭城に至り,將軍の劉該は之に降る。

## 【後秦は武威に迫り、涼は騒然】

後秦 南涼 後涼 [後秦の隴西公の碩徳は南涼を攻め、みな入貢す] 秦の隴西公の碩徳は金城より河を濟り,直ちに廣武に趣き,河西王の利鹿孤は廣武の守軍を攝(收)め以て之を避く。秦軍は姑臧に至り,涼王の隆は輔國大將軍の超、龍驤將軍の邈等を遣わして逆え戰い,碩徳は大いに之を破り,邈を生きて擒とし,俘斬は萬を計る。隆は城を嬰して固く守り,巴西公の佗は東苑之衆二萬五千を帥いて秦に降る。西涼公の暠、河西王の利鹿孤、沮渠蒙遜は各々遣使して表を奉じて秦に入貢す。

後涼 南涼 [後涼・姜紀は、南涼・傉檀と好きも、後秦・碩德に奔る] 初め、涼の將の姜紀は河西王の利 鹿孤に降り、廣武公の傉檀と兵略を論じ、甚だ愛して之を重しとし、坐して則ち席を連ね、出でて則ち同 車し、談論する毎に、夜を以て晝に繼ぐ。利鹿孤は傉檀に謂って曰く、

「姜紀は $^*$ 信に美才有り、然るに視候( $^*$ 動)は常に非ず、必ず此に久しく留まらず、之を殺すに如かず。 **紀**が若し秦に入れば、必ず人の患いと為らん。」

### 傉檀は曰く、

「臣は布衣之交わりを以て**紀**を待つ、**紀**は必ず相い費かざらん也。」

**八月**, 紀は數十騎を將いて秦軍に奔り, 碩德に說いて曰く、

「**呂隆**は孤城にして無援,**明公**は大軍を以て之に臨めば,其の勢は必ず降を請う。然るに彼は徒に文降し而して已む,未だ肯て遂に服さざる也。請う紀に步騎三千を給し,**王松勿**(続は忽) と與に**焦朗、華純**之衆に因り,其の鬱隙を伺えば,**隆**は取るに足らざる也。然らざれば,今**禿髪**は南に在り,兵は強く國は富み,若し姑臧を兼ねて而して之に據れば,威勢は益々盛んにして,**沮渠蒙遜、李暠**は抗する能わざる也,必ず將に之に歸せん,此くの如く,則ち國家之大敵と為らん矣。」

碩德は乃ち紀を表して武威太守と為す。兵二千を配して,晏然(世粛省世涼道武威県、現・武威市)に屯據す。 後秦秦王の興は楊桓之賢なるを聞き而して之を征(続は徴)し,利鹿孤は敢えて留めず。(7-061p)

■<u>[劉裕はまた孫恩を追う]</u> 詔して**劉裕**を以て下邳太守と為し,**孫恩**を郁洲に討ち,累々戰い,大いに之を破る。**恩**は是に由りて衰弱し,復た海に緣いて南に走り,**裕**は亦た隨いて而して之を邀撃す。

# 【慕容盛は暗殺され、内乱の後、慕容熙立つ】

- ▲ [慕容盛は内乱で卒す] 燕王の盛は其の父の寶の懦弱を以て國を失うに懲りて、務めて威刑を峻として、又た自ら聰察を矜り、猜忌する所多し、群臣は織介(非常に微小)之嫌有れば、皆な事に先だちて之を誅す。是れに由り宗親、勳舊、人々は自ら保たず。丁亥(15日)、左將軍の慕容國は殿上將軍(晉の殿中将軍により、慕容氏が置く官)の秦輿、段贊と禁兵を帥いて盛を襲わんと謀り、事は發し、死者は五百餘人。壬辰(20日)夜、前將軍の段璣と秦輿之子の輿、段贊之子の秦は潛かに禁中に於いて鼓噪大呼す。盛は變を聞き、左右を帥いて出戰し、賊衆は逃潰す。璣は創を被り、廂屋の間に匿れる。俄に一賊有り暗中より盛を撃ち、盛は傷を被り、輦(手でかつぐ)して前殿に升り、禁衛に申約(約束を申明)し、事\*\*章\*に而して卒す(年29)。
- ▲ <u>[慕容熙は丁氏によりて立つ、慕容定の謀反]</u>中壘將軍の**慕容拔**、冗從僕射の**郭仲**は太后の**丁氏**に白し、以て為す、

「國家は多難なり、宜しく長君を立てん。」

時に衆望は盛の弟の司徒、尚書令、平原公の元に在り,而して河間公の熙は素より丁氏の幸を得,丁氏は乃ち太子 (前巻四年に太子となる) の定を廢し,密かに熙を迎えて宮に入る。明くる旦,群臣は入朝し,始めて變有るを知り,因りて上表して熙に勸進す。熙は以て元に讓り,元は敢て當たらず。癸巳 (21日),熙 (字は道文、慕容垂の少子) は天王に即位し,段璣等を捕獲し,皆な三族を夷らげる。甲午 (22日),大赦す。丙申 (24日),平原公の元に嫌を以て死を賜る。閏月,辛酉 (元嘉曆九月19日),盛を興平陵に葬し,諡して昭武皇帝と曰い,廟號を中宗とす。丁氏は送葬して未だ還らず,中領軍の慕容提、步軍校尉の張佛等は故の太子の定を立てんと謀り,事覺われ,伏して誅せられ,定も亦た死を賜わる。丙寅 (24日),大赦

し, 改元して光始とす。

# 【後秦の碩徳の姑臧包囲の余波】

後秦秦の隴西公の碩徳は姑臧を圍むこと累月,東方之人の城中に在る者は多く外に叛せんと謀る。魏益 多も復た之を誘扇(おだてる)し,涼王の隆及び安定公の超を殺さんと欲し,事は發し,坐して死する者は 三百餘家なり。碩德は夷、夏を撫納し,守宰を分置し,食を節して粟を聚め、持久之計と為す。

後涼 [呂盛も一旦後秦に降るを決意] 涼之群臣は秦と連和せんを請い,隆は許さず。安守公の超は曰く、

「今資儲は内に竭き、上下は嗷嗷として、**張、陳** (漢の張良・陳平) をして復た生まれ使むと雖も、亦た以て策と為す無し。**陛下**は當に權は變じ屈伸するを思い、何ぞ尺書、單使を愛しんで卑辭を為して以て敵を退けんや!敵去る之後、德政を修めて以て民を覚めれば、若し卜世 (国を伝える世代の数) 未だ窮まざれば、何の舊業之復さざるを憂えるや!若し天命去れば矣、亦た以て宗族を保ち全うす可し。然らずんば、坐守して困窮す、終に將に何如するや!」

隆は乃ち之に從う,九月 (元嘉暦十月),遣使して秦に降を請う。碩德は隆を表して鎮西大將軍、涼州刺史、建康公と為す。隆は子弟及び文武の舊臣の慕容<u>築 (続は筑、燕の宗族)</u>、楊穎等五十餘家を遣わして長安に質を入れる。碩德の軍令は嚴整,秋毫も犯さず,(7-062p) 先賢を祭り,名士に禮し,西土は之を悅ぶ。

北涼 「北涼も後秦に入貢を検討」 沮渠蒙遜の部する所の酒泉、涼寧の二郡は叛きて西涼に降る,又た呂隆の秦に降るを聞き,大いに懼れ,其の弟の建忠將軍の挐、牧府長史 (蒙遜は自ら涼州牧と称し置く) の張潛を遣わして碩德を姑臧に見さしめ,其の衆を帥いて東 (請うなら西ではないか?) せんと請う。碩德は喜び,潛を張掖太守,挐を建康太守に拜す。潛は蒙遜に東遷を勸める。挐は私に蒙遜に謂って曰く、

「姑臧は未だ拔かず、**呂氏**は猶ほ存し、**碩德**の糧は盡きて將に還らんとす、久しく能わざる也。何の為に 自ら土宇を棄てて、人に制さるるを受ける乎!」

**臧莫孩**も亦た以て然りと為す。

「奚念は年少く、挐を遣わす可き也。」

冬、十月 (元嘉暦十一月)、**蒙遜**も復た遣使して**利鹿孤**に上疏して曰く、

「臣は前に**奚念**を遣わして具に誠款を披き,而して聖旨は未だ昭かにならず,復た弟の**掌**を征(続は微)す。 臣は竊かに以為らく苟しくも誠信有れば,則ち子も輕しと為さず。若し其の不信なれば,則ち弟も重しと 為さず。今寇難は未だ夷かず,詔を奉ずるを得ず,願はくは**陛下**は之を亮とせよ。」

利鹿孤は怒り、張松侯の俱延、興城侯の文支を遣わして騎一萬を將して蒙遜を襲い、萬歲(甘粛省甘涼道山丹県、現・張掖市山丹県) 臨松(同張掖県、現・張掖市粛南ユグル族自治県)に至り、蒙遜の從弟の鄯善荷子(西域の鄯善の人か)を執り、其の民六千餘戸を虜とす。蒙遜の從叔の孔遮は利鹿孤に入朝し、撃を以て質と為すを許す。利鹿孤は乃ち其の掠する所に歸し、俱延等を召して還らしむ。文支は、利鹿孤之弟也。

# 【南燕慕容備の統治小康】

南燕 [南燕慕容備徳の戯れ言] 南燕主の備徳 (元の名は徳) は群臣と延賢堂に宴し,酒 酣 にして,君臣に謂って曰くね

「朕は古よりの何等の主に芳ぶ可きかな?」

青州刺史の鞠仲は曰く、

「陛下は中興の聖主,少康、光武(後漢の光武帝)之。儔(たぐい)なり。」

**備徳**は左右を顧みて**仲**に帛千匹を賜わり、**仲**は賜る所の多きを以て、之を辭す。**備徳**は曰く、

「卿は**朕**に $^{r}$ 説 (調子を合わせる?) るを知り,**朕**は卿に調るを知らず邪!卿の對 (続、以?) える所は實に非ず,故に**朕**は亦た虚言を以て卿に賞す耳。」

### **韓范**は進みて曰くく

「天子は戲言無からん。今日之論は、君臣は倶に失うのみ。」

**備徳**は大いに悅び, **范**に絹五十匹を賜る。

南燕備徳の母及び兄の納は皆な長安に在り、備徳は平原人の杜弘を遣わして往きて之を訪ましむ。弘は 曰く〈

「臣は長安に至り、若し**太后**の動止を奉じずば、當に西に張掖に如きて、死を以て效を為さん(慕容徳は晉に仕え張掖の太守となり、その兄の納はよって張掖に家す、故に弘は張掖に往きてこれを訪ね)。臣の父の**雄**は年は六十を逾え、本縣之祿を乞い以て烏鳥之情(鳥は慈鳥にして反哺す、故に親に孝を盡すの情をいう)を申べん。」

### 中書令の張華は曰くく

「杜弘は未だ行きて而して祿を求めず,君を要 (要請、しいて求める) する之罪は大なり矣。」 備徳は曰く、

「弘は君の為に母を迎え、父の為に祿を求める、忠孝は備わる矣、何の罪か之れ有るや!」 雄を以て平原令と為す。弘は張掖に至り、盗の殺す所と為る。

- <u>[劉裕は孫恩撃滅]</u> +一月 (元嘉暦+二月), **劉裕**は孫恩を追いて滬瀆、海鹽に至り,又た之を破り,俘斬は萬數を以て,(7-063p) **恩**は遂に浹口より遠く海に竄入す。(孫恩は海に隠れて終息す)
- <u>[北魏の沒奔干攻撃]</u> +二月 (元嘉暦十二月閏月),辛亥(11日),魏主の**珪**は常山王の**遵**、定陵公の和跋を遣わして衆五萬を帥いて**沒奔干**を高平 (甘粛省涇原道固原県、現・寧夏回族自治区固原市)に襲う。
- <u>[北魏は燕の令支占領]</u> 乙卯(15日),魏の虎威將軍の宿沓干は燕を伐ち,令支を攻める。乙丑(25日),燕の中領軍の宇文拔は之を救う。壬午(42日?),宿沓干は令支を拔いて而して之に戍す。

後涼 南涼 [傉檀と焦朗の連和] 呂超は姜紀 (晏然に拠る) を攻め、克たず、遂に焦朗 (晏然に拠す) を攻める。 朗は其の弟の子の嵩を遣わして河西王の利鹿孤の質と為し以て迎えを請い、利鹿孤は車騎將軍の傉檀を 遣わして之に赴く。比に至り、超は已に退き、朗は閉門して之を拒む。傉檀は怒り、將に之を攻めんとし、 鎮北將軍の俱延は諫めて曰く、

「土を安じ遷るに(気が)重しは、人之常の情なり。**朗**は孤城にして食は無く、今年は降らずとも、後年は自ら服せん、何の必ず多く士卒を殺して以て之を攻めんや!若し其の捷たざれば、彼は必ず去りて他國に從わん。州境の士民を棄てて以て鄰敵に資するは、計に非ざる也。善言を以て之を諭すに如かず。」傉檀は乃ち**朗**と連和し、遂に兵を姑臧に曜かし、胡阬(世粛省世涼道武威県、現・武威市)に壁す。

後涼 南涼 [傉檀と呂超の戦い] 傉檀は呂超の必ず來たりて營を斫らんとするを知り、火を畜えて以て之を待つ。超は夜に中壘將軍の王集を遣わして精兵二千を帥いて傉檀の營を斫らしめ、傉檀は徐に嚴 (隊伍を組む)にして起たず。集は壘中に入り、內外は皆な火を舉げ、光照らすは晝の如し。兵を縱ちて之を擊ち、集及び甲首三百餘級を斬る。呂隆は懼れ、偽りて傉檀と通好し、苑內に於いて結盟せんと請い、傉檀は俱

延を遣わして盟に入らしめ、**俱延**は其の伏(兵)有らんと疑い、苑牆を毀して而して入る。**超**は兵を伏して之を撃ち、**俱延**は馬を失い步にて走り、凌江將軍の**郭祖**は力戰して之を拒み、**俱延**は乃ち免かるるを得る。**傉檀**は怒り、其の昌松(世粛省甘涼道古浪県、現・武威市古浪県)太守の孟示章を顯美(世粛省甘涼道武威県、現)武威市)に攻める。**隆**は廣武將軍の**荀安國**、寧遠將軍の**石可**を遣わして騎五百を帥いて之を救う。**安國**等は**傉檀**之強きを憚りて、遁げ還る。

# 【桓玄挙兵と討伐へ】

- <u>[桓玄は流民定着を計る]</u> 桓玄は其の兄の偉を表して江州刺史と為し,夏口に鎮ぜしむ。司馬の **司暢** は輔國將軍と為り、八郡の軍事を督せしめ,襄陽に鎮ぜしむ。其の將の皇甫敷、馮該を遣わして湓口に戍せしむ。沮、漳 (沮水漳水の一帯) の蠻二千戸を江南に移し,武寧郡 (湖北省荊南道松滋県、現・荊州市松滋市) を立つ。 更に流民を招集し,綏安郡 (湖北省荊南道江陵県、現・荊州市江陵県) を立つ。 詔して廣州刺史の**刁逵**、豫章太守の郭昶之を征 (続は徴) し,玄は皆な留めて遣らず。
- <u>[桓玄は晉國の三分之二を有すと自負]</u>玄は自ら晉國の三分之二を有すと謂い,數々人をして己の符瑞 を 上 ら使め,以て衆を惑わさんと欲す。又た會稽王の**道子**に箋を致して曰く、

「賊 (孫恩の事) は近郊に造れども、風を以て進むを得ず、雨を以て火を致さず、食は盡きて故に去る耳、力屈するに非ざる也。昔**國寶**の死後、**王恭**は此の威に乘じて入りて朝政を統べず、其の心を見るに**明公**に於いて侮るに非ざる也,而して之を不忠と謂う。今之貴要の腹心は,(8-064p) 時流に清望有る者は誰ぞ乎?豈に佳勝 (江東の人士の時に名位が通顕する者) 為しと雲う可けんや! 直ちに是れ之を信じる能わざる耳!爾來一朝一夕,遂に今日之禍と成る。在朝の君子は皆な禍を畏れて言わず,**玄**は \*\*\*\* くも任は遠くに在り,是くを以て事實を披寫せり。」

元顯は之を見て,大いに懼れる。

■ [張法順は元顯に桓玄討伐を進める] 張法順は元顯に謂って曰く、

「桓玄は世資(累世の資望)を承籍(受継ぎ依遽す)し、素より豪氣有り、既に**殷**(仲堪)、**楊**(佺期)を並せ (事は前巻隆安三年にあり)、專ら荊楚有り、第下(閣下・元顯のこと)之控引する所は三吳に止まる耳。**孫恩**は亂を為し、東土は地に塗れ、公私は困竭し、玄は必ず此に乗りて其の奸凶を 縦 にし、竊に用い之を憂える。」 元**顯**は曰く、

「之を為すに奈何せん?」

### 法順は曰く、

「玄は始め荊州を得,人情(人望)は未だ附かず。方に綏撫に務め、未だ他圖るに暇あらず。若し此の際に乗りて劉牢之をして前鋒と為ら使め、而して第下は大軍を以て繼ぎて進めば、玄は取る可き也。」 元顯は以て然りと為す。武昌太守の庾楷(桓玄に帰する事110巻隆安二年にあり)は玄が朝廷と怨みを構えるを以て、事成らずして、禍いが己に及ぶを恐れるに會して、密かに人をして自ら元顯に結ば使めて、云う、「玄は大いに人情(人望・人気)を失い、衆は用を為さず、若し朝廷が軍を遣わせば、己は當に內應を為すべし。」

元**顯**は大いに喜び,**張法順**を遣わして京口に至らしめ,**劉牢之**に謀らしむ。**牢之**は以て難しと為す。**法順**は還り,**元顯**に謂って曰く、

「**牢之**の言色を觀るに、必ず我に貳(心) あり、召し入れて之を殺すに如かず。爾らずんば、人の大事を敗らん。」

元顯は從わず。是に於いて大いに水軍を治し、兵を徴し艦を裝し、以て玄を討つを謀る。

# 安皇帝丁元興元年(壬寅,402年)

(この年三月に元顯破れて隆安の年号を復す、桓玄はついで改元して大亨とし、桓玄が簒奪して改元して永始という。元興と改元するは この年正月なり。資治通鑑はこの年より義熙の初元に至るまで皆、元興の元を改めず、桓玄の簒奪を認めない立場なり)

- ■<u>[桓玄討伐令を発す]</u>春,正月,庚午(1日)朔,下詔して桓玄の罪狀をいい,尚書令の元顯を以て驃騎大將軍、征討大都督、都督十八州(晉の州全部)諸軍事と為し,黃鉞を加え,又た鎮北將軍の劉牢之を以て前鋒都督と為し,前將軍の譙王の尚之を後部と為し,因りて大赦し,改元し,内外は戒嚴す。會稽王の道子に太傅を加える。
- ■元顯は盡く諸々桓を誅せんと欲す。中護軍の桓修は、驃騎長史の王誕之甥也、誕は元顯に寵有り、因りて修等が玄と志趣は同じからずを陳じ、元顯は乃ち止む。誕は、導之曾孫也。
- [元顯は劉牢之の処分には同意せず] 張法順は元顯に言って曰く、

「桓謙の兄弟は毎に上流の耳目と為る,宜しく之を斬り以て奸謀を社ぐべし。且つ事之濟と不ざるは,繁りて前軍に在り,而るに**牢之**が反覆し,萬一にも變有れば,則ち禍敗は立ちて至らん。**牢之**をして謙兄弟を殺して以て貳心無きを示さ令む可し,若し命を受けざれば,當に\*遊\*め其の所(先に劉牢之の処分をするべし)を為さん。」

#### 元顯は曰く、

「今は**牢之**に非ざれば, **(7-065p)**以て**玄**を知 (続は敵) る無し。且つ事を始めて而して大將を誅せば, 人情は安ぜず。」

再三いうも不可なり。又た**桓氏**は世々荊土に附く所と為るを以て,**桓沖**は特に遺惠有り,而して**謙**は,**沖** 之子也,乃ち驃騎司馬より都督荊、益、寧、梁四州諸軍事、荊州刺史に除し,以て西人之心を結ばんと欲 す。

▲ <u>[燕の慕容拔は遼西を取る]</u> 丁丑(8日),燕の慕容拔は魏の令支の戍を攻め,之に克ち,宿沓干は走り,魏の遼西太守の那頡を執る。燕は拔を以て幽州刺史と為し,令支に鎮ぜしめ,中堅將軍の遼西の陽豪を以て本郡(<sub>遼西)</sub>太守と為す。丁亥(18日),章武公の淵を以て尚書令と為し,博陵公の虔を尚書左僕射と為し,尚書の王騰を右僕射と為す。

## 【北魏と柔然対立の原因】

● <u>[北魏と後秦との不和]</u>戊子(19日),魏の材官將軍の和突は黜弗、素古延等の諸部を攻め,之を破る。初め,魏主の珪は北部大人の賀狄干を遣わして馬千匹を獻じて秦に昏(婚姻)を求め,秦王の興は珪が已に慕容后を立てる(前巻隆安四年にあり)を聞き,狄干を止め而して其の昏を絕つ。沒弈干、黜弗、素古延は,皆な秦之屬國也,而して魏は之を攻め,是に由りて秦、魏は隙有り。庚寅(21日),珪は大いに士馬を閱(兵)し,并州諸郡に命じて平陽之乾壁(山西省河東道襄陵県、現・臨汾市堯都区南東部)に穀を積ましめ,以て秦に備える。

**柔然** [柔然の社侖の勢力拡大、北魏の患となる] 柔然の社侖は方に秦に睦み、將を遣わして**黜弗、素古延**を救う。辛卯(22日)、和突は逆え撃ち、大いに之を破り、社侖は其の部落を帥いて遠く漠北に遁れ(これより北魏と柔然対立の原因となる)、高車(トルコ系民族、後の突厥) 之地を奪いて而して之に居る。斛律部の帥の

**倍侯利**は**社侖**を撃つも、大いに敗る所と為り、**倍侯利**は魏に奔る。**社侖**は是に於いて西北に匈奴の遺種の **日拔也雞**を撃ち、大いに之を破り、遂に諸部を吞併し、士馬は繁盛にして、北方に於いて雄たり。<u>其の地</u> <u>は西に焉耆に至り、東は朝鮮に接し</u>、南は大漠に臨み、旁側の小國は皆な焉に羈屬する。自ら**豆代可汗**(初 めて可汗の称号を使う)と號す。始めて約束を立て、千人を以て軍と為し、軍には將有り。百人を幢と為し、 幢には帥有り(軍將幢帥は魏の制なり)。攻め戰うに先に登る者は虜獲を以て賜わり、畏懦する者は石を以て其 の首を撃ちて而して之を殺す。

南涼 [傉檀は孟[示韋]を義として許す] 禿髮傉檀は顯美に克ち (去年より攻める), 孟[示韋] (一文字に作る) を執り而して之を責めるに, 其の降るの早からずを以てす。[示韋]は曰く、

「[**示章**]は**呂氏**の厚恩を受け、符を分け土を守る。若し明公の大軍が前めて至り、旗を望んで歸附すれば、恐らくは執事に罪を獲ん矣。」

**傉檀**は釋して而して之に禮し,二千餘戶を徙して而して歸り,[**示韋**]を以て左司馬と為す。[**示韋**]は辭して曰く、

「**呂氏**は將に亡びんとし、聖朝は必らず河の右を取り、人は愚かにも皆な之を知るの智無し。但だ**[示章]** は人の為に城を守りて全くす能わず、復た忝くも顯任し、心に於いては竊かに未だ安からざる所なり。若 し明公之惠みを蒙れば、戮に姑臧に就くを得使めば、死すとも且つ朽ちず。」

**傉檀**は義として而して之を歸す。

■<u>[桓玄の軍は江陵を出発]</u>東土は**孫恩**之亂に遭い、因るに饑饉を以てし、漕運は繼がず。**桓玄**は江路を禁斷し、商旅は俱に絕ち、公私は竇之し、袴 (籾殻)、 橡 (ドングリ、くぬぎ) を以て士卒に給す。**玄**は以えらく、

「朝廷は方に多く憂虞し、必ず未だ己を討つに暇あらず、(7-066p) 力を蓄え釁を觀る可し」。 及ち大軍は將に發せんとし、從兄の太傅長史の**石生**は密かに書を以て之を報ず。**玄**は大いに驚き、完聚して江陵を保たんと欲す。長史の**卞范之**は曰く、

玄は之に從い,桓偉を留めて江陵を守らしめ,表を抗げ檄を傳えて,元顯の罪狀をいい,兵を舉げて東に下る。檄は至り,元顯は大いに懼る。二月,丙午(7日),帝は元顯に西池に於いて餞し,元顯は下船して而も發せず。

● <u>[魏は沒奔干を討つ]</u>癸丑(14日),魏の常山王の**遵**等は高平に至り(去年十二月進発),**沒奔干**は其の部衆を棄て,數千騎を帥いて**劉勃勃**(後の赫連勃勃)と秦州(上邽)に奔る。魏軍は追いて瓦亭に至り,及ばず而して還り,盡く其の府庫の蓄積,馬四萬餘匹,雜畜九萬餘口を獲り,其の民を代都に徙し,餘種は分逆(分散)す。平陽太守の**貳塵**は復た秦の河東を侵し,長安は大いに震え,關中の諸城は晝も閉じ,秦人は兵を簡びて卒を訓え、以て魏を伐つを謀る。

**後秦** [秦の立太子] 秦王の興は子の泓を立てて太子と為し、大赦す。泓は孝友寛和にして、文學を喜び、善く談詠す、而るに懦弱にして多病なり。興は以て嗣と為さんと欲しすも、而るに狐り疑いて決せず、久しく乃ち之を立つ。

後涼 南涼 北涼 「姑臧は大饑、各勢力の思惑」 姑臧は大いに饑え、米の斗は錢五千に直し、人は相い食い、饑死者は十餘萬口。城門は晝閉じ、樵采の路は絕え、民は城を出て胡虜の奴婢と為るを請う者は、日に數百有り、呂隆は其の衆心の沮動を惡み、盡く之を坑にし、屍を積んで路に盈れる。沮渠蒙遜は兵を引いて姑臧を攻め、隆は遣使して救いを河西王の利鹿孤に求め、利鹿孤は廣武公の傉檀を遣わして騎一萬を帥いて之を救わしめ、未だ至らず、隆は蒙遜の軍を擊破し、蒙遜は隆と盟を請い、穀萬餘斛を留めて之に遭りて而して還る。傉檀は昌松に至り、蒙遜の已に退くを聞き、乃ち涼澤(禹貢の猪野津、甘粛省甘涼道鎭番県、現・武威市民勤県)の段塚の民五百餘戶を徙して而して還る。

南涼 [傉檀は焦朗を討つ] 中散騎常侍の張融は利鹿孤に言って曰く、

「**焦朗**の兄弟は魏安に據り (焦朗が秦軍を招く事去年五月に見える), 潜かに**姚氏**に通じ, 數々反覆を為す。今取らざれば,後に必ず朝廷の憂と為らん。」

利鹿孤は**傉檀**を遣わして之を討ち, **朗**は面縛して出でて降り, **傉檀**は西平に送り, 其の民を樂都に徙す。

## 【桓玄は進軍開始】

- <u>[桓玄は慎重に進軍、尋陽に至る]</u> 桓玄は江陵を發し,事の捷たざるを慮り,常に西還之計を為す。尋陽を過ぎるに及び,官軍は見えず,意は甚だ喜び,將士之氣は亦た振るう。**庾楷**の謀は洩れ,玄は之を囚う。丁巳(18日),詔して齊王の柔之を遣わし**騶虞幡**を以て荊、江二州に宣告して,兵を罷め使む。玄の前鋒は之を殺す。柔之は,宗之子也。
- <u>[玄軍は司馬休之を破る]</u> 丁卯(28日),玄は姑孰に至り,其の將の<u>馮該</u>等をして歷陽 (豫州の治所) を 攻め使め,襄城太守の司馬休之は城を嬰して固く守る。玄軍は洞浦 (洞口、安徽省安慶道和県、馬鞍山市和県) を 斷ち,豫州の舟艦を焚く。(7-067p) 豫州刺史の譙王の尚之は歩卒九千を帥いて浦上に陣す,武都太守の楊 秋を遣わして横江に屯せしめ,秋は玄軍に降る。尚之の衆は潰れ,塗中に逃げ,玄は之を捕獲す。司馬休 之は出でて戰い而して敗れ,城を棄てて走る。
- ■<u>[劉牢之と元顯の不和]</u> 劉牢之は素より驃騎大將軍の元顯を惡み,桓玄の既に滅びれば,元顯の益々驕恣なるを恐れ,又た己の功名の愈々盛んなりて,元顯の容れる所と為らざるを恐れる。且つ自ら材武にして,強兵を擁するを恃み,玄に假して以て執政を除き,復た玄之隙を伺いて而して自ら之を取らんと欲し,故に肯えて玄を討たず。元顯は日夜昏酣し,牢之を以て前鋒と為す。牢之は驟々門に詣るも,見ゆるを得ず,及ち帝は出でて元顯に餞し,之に公坐に遇いて而して已む。
- <u>[桓玄は劉牢之の籠絡を謀る]</u> 牢之は溧洲(西に行く路にはない。晉書劉牢之傳には冽州に作る。江蘇省金陵道江寧県、現・南京市江寧区)に軍し、參軍の**劉裕**は玄を撃つを請い、牢之は許さず。玄は牢之の族舅の何穆をして牢之を説か使めて曰く、

「古より主を震うの之威を、戴き、賞せざる之功を挾み而して能く自ら全うする者は、誰ぞや。越之**文種**、秦之**白起**、漢之**韓信**、皆な明主に事え、之が為に力を盡くしたるに、功成之日は、猶ほ誅夷を免かれず、況んや凶愚なる者之用を為す乎!君は如し今日戰勝して則ち宗を傾け、戰敗れれば則ち族を覆す、此れを以て安くに歸らんと欲する乎!若からずんば翻然として圖を改るべし、則ち以て長く富貴を保つ可し矣。古人は鉤(帯金)を射、祛(袖)を斬り、猶ほ輔佐為るに害あらず(斉の桓公は子糾と國を争う。管仲は桓公を射て帯鉤に中てる。子糾死して桓公は管仲を釋して以て相と為す。晉の獻公は寺人披をして公子重耳を蒲城に伐たしむ。重耳は垣を踰えて走る。披は其の祛を斬る。重耳國に反るや披は屢々忠言を納れる)、況んや玄と君とは宿昔之怨み無きを乎!」時に譙王の尚之は已に敗れ、人情は愈々恐れ、牢之は頗る穆の言を納れ、玄と交通す。東海中尉の東海の

何無忌は、**牢之**之甥也、**劉裕**と極諫するも、聽かず。其の子の驃騎從事中郎の**敬宣**は諫めて曰く、

「今國家は衰え危うし,天下之重しは大人と玄に在り。玄は父 (桓温)、叔 (桓冲) 之資 (資本) に藉し,全楚に據有し,晉國三分之二を割く,一朝之を 縱 にすれば朝廷を陵が使め,玄の威望は既に成り,恐らくは圖り難き也,董卓之變 (59 巻漢靈帝中平六年・獻帝初平元年にあり) は,將に今に在る矣。」

**牢之**は怒りて曰く、

「吾は豊に知らずや!今日**玄**を取るに手を反覆する如き耳。但だ**玄**を平らぐ之後,我をして驃騎 (玄は当時驃騎将軍) を奈何せ令めんや!」

三月, 乙巳(1日)朔, **牢之**は**敬宣**を遣わして**玄**に詣りて降を請う。**玄**は陰かに**牢之**を誅せんと欲し, 乃 ち**敬宣**と宴飲し,名書畫を陳じて共に之を觀,以て其の意を安悅せしむ。**敬宣**は之を覺らず,**玄**の佐吏は相い視て而して笑(続、筆×)せざるは莫し。**玄**は**敬宣**を板じて咨議參軍と為す。

# 【桓玄の建康入城と全権掌握】

■ <u>[桓玄は建康に侵入して元顯を捕らえる]</u> 元顯は將に發せんとし、玄の已に新亭に至るを聞き、船を棄て、退きて國子學に屯す。辛未(3日)、宣陽門外に陳す。軍中は相い驚き、玄の已に南桁(朱雀桁、臺城の南)に至るを言い、元顯は兵を引いて宮に還らんと欲す。玄は人を遣わして拔刀して後に隨いて大呼せしめて曰く、

「仗を放て!」

軍人は皆な崩れ潰え,元顯は乘馬して走りて東府に入り,唯だ**張法順**の一騎は之に隨う。(7-068p)元顯は **道子**に計を問い,**道子**は但だ之に對えて涕泣す。**玄**は太傅の從事中郎の**毛泰**を遣わして元顯を収めて新 亭に送り,舫前に縛して而して之を數(罪を数えるで、責める)えしむ。元顯は曰く、

「**王誕、張法順**の誤れる所と為る耳。」

- <u>[桓玄は全権掌握]</u> 壬申(4日),隆安の年號を復し,帝は侍中の**勞玄**を安樂渚に遣わす。玄は京師に入り,詔を稱して嚴を解き,玄を以て百揆を總べ、都督中外諸軍事、丞相、錄尚書事、揚州牧とし、徐、荊、江三州刺史を領さしめ(この時東晋は荊州江州揚州を全有し、徐州は僑郡多し京口は重鎮なり、桓玄は全て領す。且つ劉牢之の兵を奪わんとして徐州を領してこれを制す),黄鉞を假す。玄は桓偉を以て荊州刺史と為し,桓謙を尚書左僕射と為し,桓修を徐、兗二州刺史と為し,桓石生を江州刺史と為し,卞范之を丹陽尹と為す。
- ■初め、玄之舉兵するや、侍中の王謐は詔を奉じて玄に詣り、玄は親しく之に禮す。玄の輔政するに及び、 諡を以て中書令と為す。諡は、導之孫也。新安太守の殷仲文は、覬(109巻隆安元年にあり)之弟也、玄の姊を 仲文の妻と為す。仲文は玄の京師に克つを聞き、郡を棄てて玄に投じ、玄は以て咨議參軍と為す。劉邁は 往きて玄を見、玄は曰く、

「汝は死を畏れず、而して敢えて來たる邪?」

邁は曰く、(邁が桓玄を折く事108巻隆武帝太元17年にあり)

「鉤を射て祛を斬る、邁を並べて三と為す。」

玄は悅び、以て參軍と為す。

■ [元顯などの誅殺] 癸酉 (5日), 有司は奏す、

「會稽王の道子は離縱にして孝あらず、當に市に棄てるべし」、

詔して安成郡(呉の孫皓が豫章・長沙・盧陵を分けて置く)に徙す。元**顯**及び東海王の**彦璋**(元顯の子、隆安の初めに東海 王を継がしむ)、譙王の尚之、庾楷、張法順、毛泰等を建康の市に於いて斬る。桓修は王誕の為に固く請い, 嶺南に流すを得る。

■ [劉牢之、劉裕は去就に迷う] 玄は劉牢之を以て會稽內史と為す。牢之は(歎じて) 曰く、

「始め爾は、便ち我が兵を奪う、禍は其れ至らん矣!」

**劉敬宣**は歸りて**牢之**を諭して,命を受け使めんと請い,**玄**は之を遣わす。**敬宣**は**牢之**に**玄**を襲うを勸め,**牢之**は猶豫して決せず,移して班瀆 (薪州の西南、江蘇省金陵道江寧県、現・南京市江寧区) に屯して,私に**劉裕**に告げて曰く、

「今當に北して**高雅之**に廣陵に就き,舉兵して以て社稷を筐さん,卿は能く我に從いて去らん乎?」 **裕**は曰く、

「將軍は勁卒數萬を以て,風を望みて降服す,彼は新たに志を得て,威は天下を震わす,朝野の人情は皆な已に去る矣,廣陵は豈に至るを得る可けん邪!裕は當に反服 (戎服を脱ぎ初服に戻る) して京口に還る耳。」何無忌は裕に謂って曰く、

「我は將に何くに之かん?」

### 裕は曰く、

「吾は鎮北(劉牢之は鎮北将軍に任じられる)を觀るに必ず免かれず、卿は我に隨いて京口に還る可し。**桓玄**が若し臣の節を守れば、當に卿と之に事えん。然らずんば、當に卿と與に之を圖らん。」(この時既に桓玄を誅殺する意志あり)

■<u>[劉牢之の逃亡と自決]</u> 是に於いて**牢之**は大いに僚佐を集め、江北に據りて以て**玄**を討たんと議す。參 軍の**劉襲**は曰く、

「事之不可なる者は反より大なるは莫し。將軍は往年**王兗州**(E恭)に反し、近日は**司馬郎君(**元顯)に反し、今復た**桓公**に反す。一人にして三反す、何を以て自立せんや!」

語り單りて、趨り出、佐吏は多く散走す。**牢之**は懼れ、**(7-068p)敬宣**をして京口に之きて家を迎えしむ。期を失いて至らず、**牢之**は以為らく事已に洩れ、**玄**の殺す所と為るとし、乃ち部曲を帥いて北に走り、新洲 (江蘇省金陵道江寧県、現・南京市江寧区) に至り、縊。て而して死す。**敬宣**は至り、哭する暇あらず、即ち江を渡りて廣陵に奔る。將吏は共に**牢之**を殯斂し、其の喪を以て丹徒に歸る。**玄**は棺を斫り首を斬り、屍を市に慕さ令む。

- ■大赦して、改元して大亨とす。
- ■桓玄は丞相荊、江、徐三州を讓り (既に丞相では満足せず), 改めて太尉、都督中外諸軍事、揚州牧を授け、 豫州刺史を領し, 百揆を總す。琅邪の王德文を以て太宰と為す。
- ■<u>[劉敬宣らは秦に亡命す]</u>司馬休之、劉敬宣、高雅之は俱に洛陽に奔り、各々子弟を以て秦の質と為し以て救いを求める。秦王の興は之に符信を與え、關東に於いて募兵せ使め、數千人を得、復た還りて彭城の間に屯す。

# 【孫恩の残存勢力、盧循の登場】

■ [孫恩勢力の滅亡] 孫恩は臨海を寇し,臨海太守の辛景は撃ちて之を破り,恩の虜する所の三吳の男女は,死亡して殆んど盡きる。恩は官軍の獲る所と為るを恐れ,乃ち海に赴きて死し,其の黨及び妓妾の死に從う者は以て百を數え,之を謂う、「水仙」と。餘衆數千人は復た恩の妹の夫の盧循(盧循の初登場)を推して主と為す。循は,諶(盧志の子、初め劉琨に従い、段氏に事え、趙に事える)之曾孫也,神采清秀にして,雑より材藝有り。少き時,沙門の惠遠は嘗て之に謂って曰く、

「君は體は風素 (風流素朴) に洗ると雖も,而して志は不軌を存するは,如何?」 太尉の玄は東土を撫安せんと欲し,乃ち循を以て永嘉 (明帝太寧元年に臨海を分けて置く郡) 太守と為す。循は命を受けると雖も,而して寇暴は已まず。

▲甲戌(6日), 燕は大赦す。

南涼 [利鹿孤卒し傉檀は立つ] 河西王の禿髪利鹿孤は疾に寢ね, 遣令して國事を以て弟の傉檀に授ける。 初め, 禿髪思復鞬は傉檀を愛重し, 諸子に謂って曰く、

「傉檀の器識は、汝曹の及ぶ所に非ざる也。」

故に諸兄は子に傳えるを以てせず而して弟に傳える。**利鹿孤**は位に在り、垂拱して而して已み、軍國の大事は皆な**傉檀**に委ねる。**利鹿孤**は卒し、**傉檀**は位を襲い、更に涼王(ここより史書は南涼とす)を稱し、改元して弘昌とし、樂都(世粛省西寧道碾伯県、現・青海省海東市樂都区)に遷り、**利鹿孤**に諡して**康王**と曰う。

■ <u>[桓玄の政治、急に堕落し、飢饉が襲う]</u> 夏,四月,太尉の玄は出でて姑孰に屯し,錄尚書事を辭し,詔して之を許す,而るに大政は皆な就きて蓉る焉,小事は則ち尚書令の桓謙及び卞范之が決す。隆安より以來,中外之人は禍亂を厭とす。玄の初めて至るに及び,奸佞を黜け,俊賢を擢し,京師は欣然として,少安を得るを 冀う。既に而して玄は奢豪縱逸にして,政令は常無く,朋黨は互いに起ち,朝廷を陵侮し,乘輿供奉之具を裁損(減損)し,帝は幾んど饑寒を免かれざらんとす,是に由りて衆心は失望す。三吳は大いに饑え,戶口は減じて半となり,會稽は減じて什に三、四,臨海、永嘉は殆ど盡き,富室は皆な羅執を衣とし,金玉を懷にし,閉門して相い守りて餓死す。(7-070p)

西秦 乞伏熾磐は西平より逃げて苑川に歸り(乾歸が熾磐を西平に送る事前巻隆安四年にあり),南涼王の**傉檀**は其の妻子を歸す。**乞伏乾歸**は熾磐をして秦に入朝せ使め,秦主の興は熾磐を以て興晉太守と為す。

■五月、**盧循**は自ら海に臨みて東陽に入り、太尉の玄は撫軍中兵參軍の**劉裕**を遣わして兵を將して之を撃たしめ、**循**は敗れ、永嘉に走る。

高句麗 [高句麗好太王は平州の宿軍占領] 高句麗は宿軍 (龍城の東北、平州刺史の治所、熱河朝陽県東北、現・朝陽市) を攻め、燕の平州刺史の慕容歸は城を棄てて走る。

## 【柴壁の戦いで後秦と北魏の立場逆転】

後秦 「姚興は北魏に反撃」 秦主の興は大いに諸軍を發し、義陽公の平、尚書右僕の射狄伯支等を遣わして歩騎四萬を將して魏を伐たしめ、興は自ら大軍を將いて之に繼ぎ、尚書令の姚晃を以て太子の泓を輔け長安を守らしめ、沒奔干を權に上邽に鎮ぜしめ、廣陵公の欽を權に洛陽に鎮ぜしむ。平は魏の乾壁(山西省河東道襄陵道、現・臨汾市堯都区南東部)を攻めること六十餘日、之を拔く。

- ●秋,七月,魏主の珪は毘陵王の順及び豫州刺史の長孫肥を遣わして六萬騎を將して前鋒と為し,自ら大軍を將いて繼ぎて發し以て之を撃つ。
- ■八月,太尉の玄は朝廷に諷し、玄が元顯を平らげるの功を以て豫章公に封じ、殷、楊を平らげるの功に て桂陽公に封じ、並びに本から南郡に封じしは故の如し。玄は豫章を以て其の子の昇に封じ、桂陽を其の 兄の子の俊に封じる。
- ●後秦 [柴壁の攻防戦] 魏主の珪は永安 (山西省河東道霍県、現・臨汾市霍州市) に至り,秦の義陽公の平は驍將

を遣わして精騎二百を帥いて魏軍を視わしめ、長孫肥は逆え撃ち、盡く之を禽とす。平は退き走り、珪は之を追い、乙巳(9日)、柴壁(汾水の東、山西省河東道曲妖県、現・臨汾市曲沃県)に及ぶ。平は地を嬰して固守し、魏軍は之を圍む。秦王の興は兵四萬七千を將して之を救い、將に天渡(汾水の渡津、山西省河東道汾城県、現・襄汾県汾城県、)に據りて糧を運び以て平に饋らんとす。魏の博士の李先は曰く、

「兵法には、高き者は敵の棲む所と為り (敵に包囲される),深き者は敵の囚う所と為る。今秦は皆な之を犯す,宜しく**興**の未だ至らざるに及び,奇兵を遣わして先ず天渡に據るべし,柴壁は戰わずして而して取る可き也。」

**珪**は重圍の增築を命じ、内に以て**平**之出るを防ぎ、外に以て**興**之入るを拒ぐ。<u>廣武將軍の**安同**</u>は曰く、「汾東には蒙坑(山西省河東道曲妖県、現・臨汾市曲沃県)有り、東西は三百餘里、蹊徑は通らず。**興**の來たりて、必ず汾西より直ちに柴壁に臨まん。此くの如くならば、虜の聲勢は相い接し、重圍は固しと雖も、制する能わざる也。浮梁を為り、汾西に渡り、圍を築いて以て之を拒むに如かず。虜至れば、其の智力を施す所無し矣。」

**珪**は之に從う。**興**は蒲阪 (山西省河東道永濟県、現・運城市永済市) に至り,魏之強きを憚れ,久しくして乃ち兵を進める。甲子(28日),**珪**は步騎三萬を帥いて**興**を蒙坑之南に逆撃し,斬首は千餘級,**興**は退き走ること四十餘里,平も亦た敢えて出ず。**珪**は乃ち兵を四に分けて險要に據り,秦兵をして柴壁に近づくを得ざら使む。(7-069p)**興**は汾西に屯し,壑に賃 (続は馮) して壘と為し,柏材を東ねて汾の上流より之を縱ち,以て浮梁を毀さんと欲し,魏人は皆な鉤取 (鈎で引っ掛け取る) して以て薪蒸と為す。

- ●後秦 [後秦主興の目前で、北魏軍は姚平を破る。後秦の最盛期終わる] 冬,十月,平は糧竭き矢盡き,夜,衆を悉くして西南の圍いを突きて出ることを求める。興は汾西に兵を列にし,烽を舉げ鼓噪して應を為す。興は平が力戰して突くを免かれんと欲し,平は興が圍みを攻めて引接せんを望み,但だ叫び呼んで相い和し,敢えて圍いに逼る莫し。平は出るを得ず,計窮まりて,乃ち麾下を帥いて水に赴きて死し,諸將は多く平に從いて水に赴く。珪は善く游ぐ者は鉤して之を捕え使め,免かるるを得る者無し。狄伯支及び越騎校尉の唐小方等四十餘人を執り,餘衆二萬餘人は皆な手を斂めて禽に就く。興は坐して其の窮みを視,力して救う能わず。軍を舉げて慟哭し,聲は山谷を震わす。數々遣使して魏に和を求めるも,珪は許さず,勝ちに乗りて蒲阪に進攻し,秦の晉公の緒は固く守りて戰わず。柔然の魏を伐たんと謀るに會して,珪は之を聞き,戊申(13日),兵を引いて還る。
- ●或は太史令の**晁崇**及び弟の黄門侍郎の**懿**は潜かに秦兵を召すと告げ,**珪**は惡陽に至り,**崇、懿**に死を賜る。

後秦秦は河西の豪右萬餘戸を長安に徙す。

# 【劉牢之一党は南燕・後秦に亡命】

- <u>[桓玄は劉牢之一党を粛清、西燕・後秦に走る者あり]</u>太尉の玄は吳興太守の高素、將軍の竺謙之及び 謙之の從兄の朗之、劉襲並びに襲の弟の季武を殺す,皆な劉牢之の北府の舊將也。襲の兄の冀州刺史の軌 は司馬休之、劉敬宣、高雅之等を邀え共に山陽(江蘇省淮揚道淮安県、現・淮安市淮安区)に據り,兵を起こして 玄を攻めんと欲し,克たず而して走る。將軍の袁虔之、劉壽、高長慶、郭恭等は皆な往きて之に從う。將 に魏に奔らんとし,陳留の南に至り,分けて二輩と為す。軌、休之、敬宣は南燕に奔る。虔之、壽、長慶、 恭は秦に奔る。
- [逃亡先に魏を選ばなかった理由] 魏主の珪は初めて休之等の當に來たるを聞き,大いに喜ぶ。後に其

の至らずを怪しみ, 兗州 (隆安五年長孫肥を兗州刺史とするも、実際はまだ治めていない) に令して求め訪ね, 其の從者を獲, 其の故を問う。皆な曰く、

「魏朝の威聲は遠く被り,是を以て**休之**等は鹹な歸附せんと欲する。既に而して**崔遑**(前巻三年にあり)の殺され被るを聞き,故に二國に奔る。」

**珪**は深く之を悔やむ。是より士人に過有れども、頗る優容せ見る。

南涼南涼王の傉檀は呂隆を姑臧に攻める。

## 【後燕に苻謨の二女入る】

- ▲ <u>[後燕の後宮内乱、苻謨の二女]</u> 燕王の熙は故の中山尹 (慕容實即位の頃) の**苻謨**の二女を納め,長ずるは 娥娥と曰い,貴人と為し,紫鏡な 台間 英と曰い,貴嬪と為し,貴嬪は尤も寵有り。**丁太后** (慕容熙と通じる事前年にあり) は忽恚し,兄の子の尚書の信と熙を廢して章武公の淵を立てんと謀る。事は覺われ,熙は丁太后に逼りて自殺させ,葬るに后の禮を以てし,諡して獻幽皇后と曰う。十一月,戊辰(3日),淵及び信を殺す。
- ▲ <u>[後燕の高和の反乱]</u> 辛未 (6日), **熙**は (龍城の) 北原に畋し, 石城令の**高和**と尚方の兵が與に後に於いて亂を作し, 司隸校尉の**張顯**を殺し, 入りて宮殿を掠し, 庫兵を取り, 營署を脅し, 閉門して城に乗る。**熙**は馳せて還り, 城上の人は皆な仗を投げて開門す。盡く反者を誅し, 唯だ**和**は走り免れる。**(7-071p)**甲戌 (9日), 大赦す。
- ●魏は庾岳を以て司空と為す。
- ●十二月、辛亥(17日)、魏主の珪は雲中に還る。
- ●<u>【柔然の侵攻</u>】柔然可汗の社倫は珪が秦を伐つを聞き、参合陂より魏を侵し、豺山(山西省雁門道右玉県、 朔州市右玉県)に至り、善無(県、山西省雁門道右玉県の南、朔州市右玉県)の北澤に及び、魏の常山王の**遵**は萬騎を以 て之を追い、及ばす而して還る。
- ■<u>[司馬道子の毒殺]</u>太尉の玄は御史の杜林をして會稽の文孝王の道子を防衛せ使めて安成に至り、林は玄の旨を承け、道子を擔(鴆毒を盛る)し、之を殺す。

|<u>北涼| [北涼の梁中庸の西涼への逃亡]</u>||沮渠蒙遜の署する所の西郡太守の**梁中庸**は叛し,西涼に奔る。**蒙** ||遜は之を聞き,笑って曰く、

「吾は中庸を待ち,恩は骨肉の如し,而して中庸は我を信じず,但だ自ら ${\centermath{\widetilde{\Phi}}}$ く耳,孤豊に此の一人に在らん邪!」

乃ち盡く其の
(妻子) を歸す。西涼公の **渇は中庸**に問いて曰く、

「我は**索嗣**に何如?」(前巻の四年の経緯あり、李暠は素より善き索嗣を殺させた)

### 中庸は曰く、

「未だ量る可からざる也。」

#### **温**は日く、

「**嗣**の才度が若し我に敵せる者ならば、我は何んぞ能く千里之外に於いて長繩を以て其の頸を絞める 邪?」

### 中庸は曰く、

「智には短長有り、命には成敗有り。殿下之索嗣とは、得失之理は、臣は實に未だ之を能くご詳らかにせず。

若し身死するを以て負けと為し、計行うを勝ちと為せば、則ち**公孫瓚** (60 巻漢献帝初平四年にあり) は豊に**劉虞** に於いて賢とする邪?」

**暠**は默然とする。

後秦 [袁虔之は桓玄の没落を見抜く] 袁虔之等は長安に至り,秦王の興は問いて曰く、

「桓玄の才略は其の父に何如?卒に能く功を成す乎?」

### **虔之**は曰く、

「**玄**は晉室の衰亂に乘り,宰衡に盜據し,猜忌にして忍に安んじ,刑賞は公ならず。以て臣之を觀れば, 其の父に如かざること遠し矣。**玄**は今已に大柄を執り,其の勢いは必ず將に篡逆となり,正に他人の為に 驅除す可き耳。」

**興**は之を善しとす,**虔之**を以て廣州刺史と為す。

後秦 是の歲,秦王の興は昭儀張氏を立てて皇后と為し,子の懿、弼、洸、宣、諶、愔、璞、質、遠、裕、 國見を封じて皆な公と為し,遣使して**禿髮傉檀**を拜して車騎將軍、廣武公と為し,**沮渠蒙遜**を鎮西將軍、 沙州刺史、西海侯と為し,李**暠**を安西將軍、高昌侯と為す。

後秦秦の鎮遠將軍の趙曜は衆二萬を帥いて西に金城に屯し、建節將軍の王松匆 (続は忽) は騎を帥いて呂隆を助けて姑臧を守る。松匆は魏安に至り、傉檀の弟の文真は撃ちて而して之を虜とす。傉檀は大いに怒り、松匆を送りて長安に還り、深く自ら陳謝す。

令和 2 年 7 月 25 日 完訳開始 11457 文字 令和 2 年 7 月 28 日 完訳終了 21993 文字

令和 2 年 11 月 13 日 微修正 22211 文字 現代地名・年表対応

令和3年12月26日 書下し終了 23724文字